

中津港埋め立て計画 要望書

中津港港湾整備事業等についての要望書

1999年5月13日

大分県知事宛、運輸大臣宛、運輸省第4港湾建設局別府港湾空港工事事務所所長宛

本会大分県支部長との連名

1999年5月13日

大分県知事
平松守彦 殿

財団法人 日本野鳥の会
会長 黒田 長久
日本野鳥の会 大分県支部
支部長 武石 干雄

中津港港湾整備事業等についての要望書

貴職におかれましては、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。また鳥獣保護行政におきましてご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、中津市の干潟は、自見川河口を中心に環境庁の「シギ・チドリ渡来地目録」(1997)のなかで、「東アジア～オーストラリア地域におけるシギ・チドリ類に関する湿地ネットワーク」の参加基準を満たす78ヶ所のひとつとして重要湿地に挙げられています。

日本湿地ネットワークのシギ・チドリ委員会による「シギ・チドリ全国カウント報告書」(1998年春)によると、中津海岸は、17種3885羽が記録され、全国271地点の中で12番目にシギ・チドリの数が多い地点となっています。

また、毎年実施されているWWF-Jによる、ズグロカモメ(環境庁のレッドリストで絶滅危惧II類、世界で3000羽)の全国調査でも、近年中津市は50羽から70羽が記録され、この点からも中津の干潟はラムサール条約登録基準を満たし、国際的に重要な干潟です。

この中津の干潟のなかで工事が開始されます港湾整備事業につきまして、我々が検討いたしましたところ、下記の様な問題点が考えられましたので、改善についての要望書を提出いたします。

なるべく迅速に御検討のうえ、ご面倒ながら文書にてご回答願います。勝手ながら、回答期限は5月末日とさせていただきます。

1. 我々の中津市での聞き取り調査によりますと、水産庁のレッドデータブックで絶滅危惧種と評価されるカブトガニ、同じく絶滅危惧種と評価されるアオギスについて最近の目撃・捕獲情報が数多く寄せられており、中津港周辺で繁殖していると考えられます。アオギスについては、九州大学の伊元九弥氏の調査で中津港周辺にアオギスの仔

稚魚が存在し、繁殖していることが明らかになっています。カブトガニについては、今回の環境アセスメントが既存調査として使用した「中津エコポート調査資料編」の中で、昭和新田地区（埋立予定地）で生きたカブトガニが発見された情報があると記載されています。

にもかかわらず、この二種については、今回の環境アセスメントには一言も記載がありません。アオギスの採餌場や、カブトガニの幼生の生息地を埋め立てないように、もっと詳細な調査を要望します。これは、環境アセスメントの県知事意見にある、工事中に新たな貴重種が発見された場合に必要な処置に相当します。

2. 中津市の東浜、大新田海岸には大分県内ではまれな泥質干潟が存在し、このことが多くの野鳥を引きつける原因であると考えられます。また、我々の調査では、この地区で、WWF-J（1996）サイエンス・レポート「日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状」により絶滅危惧種とされるイチョウシラトリ、同じく絶滅危惧種ムラサキガイ、同じく絶滅危惧種イボウミニナの新しい貝殻を多数発見しています。これらは今回の環境アセスメントには登場しておらず、今後これらの生物について詳細な再調査が必要です。
3. 平成4年から平成7年に行われた「中津市アサリの里事業」において、東浜の沖の泥を浚渫し海砂を投入したため、東浜・大新田海岸の泥質干潟が砂質化しシギ・チドリ類やズグロカモメの渡来数が激減したことがあります。一見へドロ状に見える泥質干潟が、このように多数のシギ・チドリ類、ズグロカモメ、絶滅危惧種の貝（軟体動物）を育てる基盤となっています。よって、この泥質干潟を保全することを要望します。
4. 計画されている－11mの航路は、東浜・大新田海岸の泥（粘土・シルト）を航路に流入させ、東浜・大新田海岸を砂質干潟に変化させるものと考えられます。このことは野鳥をはじめ泥質干潟に依存した底生生物を、滅亡させることとなります。これを防ぐには、航路を浅くするか、大規模な防泥堤の建設が必要と考えられます。大規模な防泥堤の例としては、東京湾の船橋港航路に隣接する三番瀬防泥堤があります。
5. 計画されている埋立予定地区は、貴重な生物の生息・繁殖地である可能性が高く、また航路の浚渫により泥質干潟が消失すると考えられますので、さらなる詳細な調査と予測・評価をされ、環境保全の対策をしてください。これが終わるまでは工事を一時中断し、埋立面積の削減と、航路の水深の軽減化、大規模な防泥堤の建設の実現を要望します。
6. 今後県港湾課の行うモニタリング調査において、鳥類調査はシギ・チドリ類の渡来時

期にあわせて4月下旬から5月上旬、8月中旬から9月中旬にかけての調査を必ず取り入れてください。河口部とラグーンの塩性植物（レッドデータブック記載植物）、干潟に生育するレッドデータブックで情報不足のコアマモについても、モニタリング調査が必要です。底質粒度組成調査と干潟生物調査においては、東浜、大新田海岸の泥質干潟が損なわれていないかを調べるため、モニタリング調査地点に東浜・大新田海岸を加えるよう要望します。計画されている完成1年後までのモニタリング調査では不十分で、完成後最低でも5年間はモニタリング調査の必要があると思われます。モニタリング調査の結果についてはすぐに公開（インターネットのホームページ等で）し、市民から広く意見を求めることを要望します。

7. 今後計画されている中津エコポート計画では、東浜・大新田海岸の泥を除去し覆砂して砂浜にし、人間が海に入りやすくする計画です。東浜・大新田海岸の泥質干潟は、干潟の生物とこれを利用する鳥類にとって重要なものです。このように岸辺で多様な生物を観察できることこそが、エコポートの概念であるはずです。中津エコポート計画の大幅な変更・見直しを要望します。

以上